



You Ain't Heard Nothin' Yet ! ヤー!

6月は『紫陽花』

Vol.37

2022.6.10 えんじょい工房・『YAH!』編集室

堰を切ったように…

タガが外れたのは、あくまでも恣意的に堰を切ったからで、街に溢れる人波のせいではない、それは結果なのだ。大使館に観光ビザの発給を求めて大勢が並んでも、「何を愚かな…」というのは勝手だが、これもまた「成り行き」といふべきだろう。検証、判断の順番を間違えると誰かは喜ぶか胸をなでおろすかもしれないが、「自己責任」などというおぞましい言葉がまたまた巷を跋扈することになりかねない。

水の流れは止められないし、その勢いを削ぐことはまた別のところに無理を生じさせ、新たな問題が発生しかねない。ただ、客観的な視点が必要であり、ある種の行儀良さを忘れなければ事態は鎮静に向かうだろうとは思ふ。そのためにも、正確で、煽りのない冷静な情報の提供、受取が欠かせない。

【こんな唄に出くわした⑥】

倅せはここに

作詞・作曲：大橋節夫

秋の夜は更けて
すだく虫の音に
疲れた心いやす
吾が家の窓辺
静かにほのぼのと
倅せはここに

その昔確かに聞いたような記憶はある、当時既に「懐メロ」の扱いであったような気がしているが、とにかく、聴いていて心地よい唄である。明らかにハワイアンなのだが、そんなことは関係なく、何度続けて聴いても飽きない、歌詞も曲も何処にも障ることなく、ずっと聴いていられる唄付きのイーजीリスニングなのだ。BINGOの比嘉栄昇のものも聴いてみたが、これもまたゆったりとした時間の流れに身を任せられて落ち着く…まさに幸せなひと時を得られるというわけだ。

【今月の花 六月】

紫陽花

表通りより路地裏の軒下がよく似合う。雨にうたれる風情も良いが、ブロック塀の陰もしくは雑木林の片隅にこそ相応しい。とすると、紫陽花は向日葵の対局に在るべき花なのか、心は決して躍ることなく、癒されるということでもない、紫もピンクも淡いばかりで、どうも釈然としないが、それでもとにかくこの時季どうしても居て欲しい花である。六月というと、菖蒲（あやめ）もあれば、杜若（かきつばた）もこの季節を彩るが、それでもこれほど「湿気」の似合う花は、水辺を選んで咲く

【こんな映画を観てきた】

『恐怖のメロディ』 Play Misty for Me -1971/米 監督:クリント・イーストウッド

ラジオ局のDJ(クリント・イーストウッド)が精神異常の女(ジェシカ・ウォルター)につきまとわれて恐ろしい状況に追い込まれるというサイコミステリーである。これがイーストウッドの第一回監督作品なのだが、個人的には、これが彼の最高作品ではないかと密かに(勝手に)思っている。この女がいつも決まってリクエストしてくるのが『ミスティ』、シカゴ上空から夜景を見て出来た曲だというのが、とにかく名曲で、その後ジャズといえはこの曲を…ということ(あくまで個人的)になった。それはともかく、「かわいさ余って、憎さ百倍！」本人はおろか復縁を望む妻にまで恐怖が迫る、油断大敵(身から出た錆という要因も少し?)ある、ちょっとした緩みは大きな災いの元、くわばらくわばら…である。

花以外ではない…と思う、やはり梅雨入りあたりには紫陽花ということになるのだろう。憂いを増幅させる花の色、更に雨の雫が葉先から落ちる情景は、それだけで一本のドラマが仕上がっている。